新羅仏教と日本の深いゆかり

浄土宗の源流は新羅の元暁

元暁宗和気山統国寺住職

崔無碍師に聞く

新羅の僧、元暁（がんぎょう）と義湘（ぎしょう）を高く評価したのが鎌倉時代、高山寺の明恵で、国宝「華厳宗祖師絵伝」を監修し詞を書いたとされる。とりわけ元暁は華厳宗とともに新羅浄土教の先駆者で、その思想は中国でも高く評価されている。日本仏教に大きな影響を及ぼした元暁について、大阪・天王寺にある元暁宗統国寺の崔無碍住職に話を伺った。

（多田則明）

奈良仏教の源流

——元暁宗という宗派は？

韓国にあり、日本でも元暁宗を掲げている寺がいくつかあります。元暁（617—686年）は新羅の華厳宗の僧侶で、新羅浄土教の先駆者とされ、華厳宗よりも浄土宗の色合いが濃い宗派です。日本の浄土宗、浄土真宗、時宗など浄土宗系のすべての宗派に影響を与えていて、法然が「浄土宗」という言葉を採ったのも元暁の『遊心安楽道』からです。同書の著者については異論がありますが、内容は元暁の教えです。

親鸞は仏教の戒を破って肉食妻帯しましたが、元暁はそれを7世紀に実践し、僧も俗人も変わりないことを示しました。「称名念仏」を中心とする浄土思想を確立したのは中国の善導（613—681年）ですが、日本の浄土宗・浄土真宗の内容を見ると元暁の影響の方が大きいと言えます。

新羅における華厳宗の祖とされるのは義湘（625—702年）で、奈良の東大寺に華厳宗を伝えたのは新羅僧の審祥（しんじょう）です。ですから、日本の仏教は最初に百済から伝わりますが、骨格を形成したのは新羅の華厳宗と浄土宗です。その後、行基や空也が現れ、法然が宗派としての浄土宗を開きます。

——朝鮮三国時代の戦乱を背景に、新羅では仏教は護国思想と結びついて信仰されるようになりますが。

元暁にとって大切なのは国家よりも民衆です。新羅では、王侯貴族の若者を中心に、古来からの天神信仰に道教・儒教・仏教を取り込んだ宗教を信仰する花郎集団が生まれ、後に武術も行うようになり、新羅による三国統一に活躍しました。花郎が信仰したのは鎮護国家の仏教ですが、元暁はそれまでの貴族仏教に反対し、仏教は民衆の中に入っていくべきだと考えたのです。

——元暁は大きなひさごを叩きながら歌を歌い教えを説いたそうで、一遍の踊念仏のようです。

元暁の思想を継承したのが浄土宗で、実践を継承したのが浄土真宗や時宗です。基本的には通仏教（宗派を超えた釈迦の教え）ですから、平安時代後期の天台宗の僧で、融通念仏宗の開祖となった天台僧の良忍も『遊心安楽道』をしっかり学んでいます。

元暁は「念仏おどり」を創始したとも伝えられ、「往生歌」も作っています。身分を問わず往生できるという浄土思想が、身分制度の厳しかった時代に下層にまで広まったのです。

調和と統一

——花郎集団では、末世に兜率天から弥勒菩薩が現れて人々を救済するという弥勒信仰が中心ですが。

弥勒菩薩は、釈迦の次に成仏して如来となり、多くの人を救済すると言われている菩薩です。約56億年後に娑婆世界に現れるというのが「下生（げしょう）」で、弥勒如来の下生は遠い未来ではなく、「今」なされるからそれに備えなければならないというのが「下生信仰」です。それに対して、自分が死んだら弥勒菩薩のおられる兜率天に往生し、弥勒と一緒に修行して救われたいと願う「上生（じょうしょう）」信仰もありました。

新羅初期には貴族を中心に弥勒下生信仰が先行していたのに対して弥勒上生信仰を重視し、『大乗起信論』の影響を受け、弥勒浄土から阿弥陀浄土の信仰に移ったとされます。「念仏すれば阿弥陀如来の西方極楽浄土に往生できる」という教えの方が民衆には簡単ですから、元暁は衆生を救うための方便として浄土信仰を活用したのです。

——元暁の思想は「和諍（わじょう）」にあると言われますが。

和諍とは、争いや異なった考えを調和させることです。当時、既にいろいろな宗派に分かれていた仏教理論を、高い次元から総合（会通）しようとしたのが元暁の和諍思想です。もともと、釈迦の説いた真理は一つですから、各宗派の特性を認めながら、それらの肯定的な側面を受容すべきだという考えです。

さらに、悟りとは、自分の内に在る「一心」に立ち返ることで、「和諍」の基底に「一心」の思想があると説き、和諍思想を通じて一心の根源に戻り、衆生のために行するという実践命題を導き出したのです。そして、涅槃の世界は現世を離れて他に存在するものではなく、今我々が住んでいるこの世界が真如の世界に成りうるものであることを強調しました。つまり、衆生は輪廻をめぐることなく、一心に至れば、誰でも現世において悟りを得ることができると説いたのです。

そして、仏教の究極的な目標は深い哲学を極めるだけでなく、常に衆生を救済することにあるとしたのが無碍の実践で、元暁は華厳の思想を易しく解いて「無碍歌」を作り、町の至るところに風のように現れて歌ったりしながら仏教の生活化に努めました。無碍の実践なので障害になるものは何もなく、肉を食し、妻帯もしたのです。一心、和諍、無碍が心、理論、実践で、そこにすべてが含まれます。

——道教や儒教も取り入れたそうですね。

道教は高句麗に広く受け入れられました。すべて人間にかかわることですから、心は仏教、健康は道教、礼節は儒教と言え、分けることはできません。元暁は東アジアの宗教を人間の生き方として一つにしたのです。

天台僧を助けた新羅人

——聖徳太子に仕えた秦河勝は新羅仏教系統を信奉していました。秦氏は秦の末裔、百済系など諸説ありますが。

修験道の白山信仰や稲荷信仰、八幡信仰は秦氏が持ち込んだものです。役小角も秦氏で、朝鮮の山は白頭山から始まり太白山脈など「白」が付いています。古代に浸透し、日本古来の信仰として定着したものです。

——円仁の『入唐求法巡礼行記』を読むと、唐に在住する新羅人に助けられています。

唐末期は廃仏の嵐が吹き荒れ、円仁は騒然とした長安から徒歩で107日かけ山東半島にある新羅人の町・赤山にたどり着き、新羅商人の貿易船に乗って帰国を果たしました。円仁は赤山の新羅寺で新羅仏教を学び、赤山明神を比叡山に勧請したので、横川（よかわ）中堂の正面に赤山堂があります。

円仁の次に入唐した円珍は、唐から帰国の途、船が遭難しそうになったとき、現れた新羅明神に危機を救われたので、帰国後、三井寺に新羅明神を祀ったのが今の園城寺の新羅善神堂です。日本仏教の総本山とも言える比叡山も、新羅仏教と深いかかわりがあります。

——朝鮮では新羅の次の高麗は仏教が国教でしたが、李氏朝鮮は儒教を国教としたため仏教が衰退します。

転機になったのが豊臣秀吉の朝鮮侵略で、高僧として知られる惟政（いせい、松雲大師、四溟堂とも呼ばれる）が王の命を受けて僧侶らに呼びかけ、義勇軍として大奮闘したことです。それ以後、僧兵が国境警備に当たるようになり、廃仏政策も緩和されるようになりました。惟政は加藤清正や徳川家康と会談して講和交渉を行うなど外交面でも大きな役割を果たし、戦後の国交回復でも家康と交渉しています。

——日本も主に臨済宗の禅僧が外交を担当していました。

仏教を共有し、漢文ですから意思疎通ができるので、僧侶が外交で活躍したのです。今でも、臨済宗相国寺派の有馬頼底管長は仏教交流のため北朝鮮を訪問しています。北朝鮮にも寺があり僧侶がいますから、僧侶や仏教者の交流は平和構築のため重要です。

南北統一を願い

——統国寺という名称の由来は？

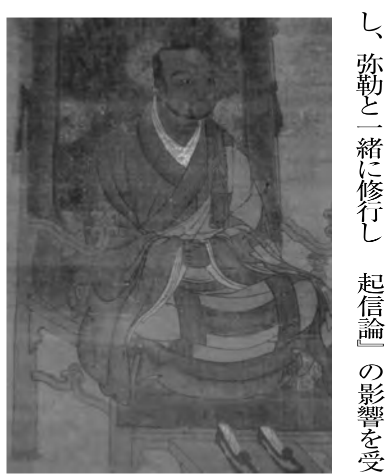
朝鮮半島の南北統一への願いからです。当寺は古代には難波百済寺だったとされる法相宗の寺でした。大坂夏の陣で真田幸村軍に焼き打ちされたのですが、1689年に黄檗宗の僧により再建され、近くにある和気清麻呂が開いた和気堀にちなんで和気山邦福寺と称するようになります。明治以降、文化人の社交場としても栄えましたが次第に衰退し、1970年に在日本朝鮮仏教徒協会が再興に乗り出し、統国寺と命名したのです。調べてみると百済寺だったことが分かり、不思議な縁に驚いたそうです。長く黄檗宗だったことから本尊は釈迦三尊の黄檗式です。

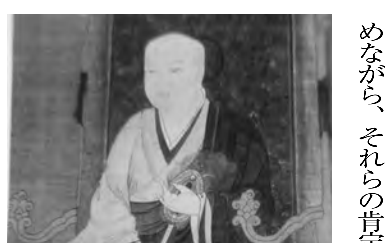
——生駒山にも朝鮮寺と呼ばれる寺があり、大阪の在日の人たちがお参りしています。

そんな人たちが1948年に在日本朝鮮仏教徒協会（朝仏協）を設立したのです。その後、朝鮮半島が北と南に分断されたので、国内でも北朝鮮系の総聯と韓国系の民団が対立するようになりました。仏教徒協会は広い意味では総聯系ですが、仏教に南北対立はありませんから。

統国寺

崔無碍師は北海道生まれの在日二世。統国寺の3代目住職徐泰植と大阪で出会い、僧侶になって寺を継いだ。1994年に、韓国系の在日本韓民族仏教徒総連合会（韓仏連）と元暁にちなむ「海東会」を発足させ、南北交流を進めている。「統国寺」の書は有馬頼底師。


元暁


義湘

〔連載〕

キリスト教で読み解くヨーロッパ史 ⑥

宗教研究家　**橋本雄**

十字軍の遺跡

中東レバノンの首都ベイルートから北へ約30キロのビブロス市。聖書の英語名「バイブル」はこの町の名前ビブロスから来ている。そこにイスラム勢力に占領された聖地エルサレム奪還を目指して、キリスト教徒軍が侵攻した十字軍時代の遺跡が残っている。

レバノン周辺は十字軍とイスラム勢力の激戦地であった。崩れ落ちた遺跡を見ると歴史の重みを感じ、当時の戦闘の喚声と悲鳴が聞こえるようだ。

現在はイスラムのモスクとキリスト教会が共存し、美しい海が広がっている。海岸沿いの遊歩道を歩く家族連れを見ると、ひと頃のレバノン内戦などもなかったような感じにもなる。英語のアルファベットもレバノンの文字、旧約聖書の言うカナンの文字である。「聖書とアルファベットの発祥の地」という誇りを、レバノンの人々はよく口にする。

歴史では、訳も分からない熱情に動かされ、国家や人々がとんでもない方向に動いてしまうことがある。「時代の熱気」「狂気の時代」とでも言おうか、この時もそうであった。

1095年、ローマ教皇の訴えに応えたフランスの隠者ピエールの呼びかけで、聖地エルサレムの奪回を目指し、4万人とも言われる農民、都市貧民、女子供がエルサレムを目指して歩き出した。おおよそ軍隊と言えない無頼の群衆が、行ったこともないエルサレムまで歩き、見たこともないイスラムの人々を打ち破り、聖地を奪回しようというのである。信仰的熱情だけが彼らの武器であった。

やがて、食料や武装などの十分な準備もないままに動く集団は、略奪を働く以外にはなくなってしまった。全ては「神が準備する」という安易な信仰があったのかもしれない。「聖戦であるから」と全ての犯罪行為は正当化されたのかもしれない。普通に見れば彼らは野盗の類である。

結局、彼らはイスラムや他の軍事勢力から殺害されるか奴隷として売られてしまう。これが悲惨な結末に終わった民衆十字軍である。信仰が時として「過激」につながる[illegible]例で、狂信と信仰は違[illegible]

ビブロスの十字軍砦跡

狂信と信仰の間の十字軍運動

同床異夢の十字軍

十字軍運動は11世紀末から13世紀にかけてヨーロッパ全体を巻き込んだ大騒動（運動）である。セル[illegible]受けていた東ローマ皇帝が、ローマ教皇に援を要請した[illegible]ローマ教皇ウルバヌス2世は1095年、クレルモンの宗教会議で聖地[illegible]王侯に呼びかけた。教皇の狙いは東ローマを援[illegible]マに君臨することが目的であったという。

王や諸侯は領地の確保[illegible]撃・虐殺・略奪、十字軍の乱暴狼藉には目に余るものがあった。さらには、エルサレム占領後の虐殺や略奪は7日に及び、凄惨を極めた[illegible]

ヨーロッパ諸侯の莫大な[illegible]にもかかわらず、結局エルサレムはイスラム勢力に奪還されている。その際のアラブの英雄がサラディーン[illegible]、サラディーンはキリスト教勢力を崩壊させた。イスラム[illegible]十字軍よりよ[illegible]ていたという。

第4回十字軍は北イタ[illegible]ェの商人[illegible]200年の中で[illegible]た。既に[illegible]同床異夢[illegible]結局分解[illegible]った。

[illegible]マアルーフは『アラブが見た十字軍』（ちくま学芸文庫、2001年）で「キリスト教とイスラム1000年の戦いがここから始まった」と書き、多くの学者もそういう。アラブからは、十字軍はキリスト教軍の侵略であり、降って湧いた災難ということになる。

十字軍勢力の中心が初期はフランスであったので、彼らは「フランク」と呼んだ。ただ、アラブ（サラセンとも呼ばれた）世界が常に部族対立の状態にあり、効果的に十字軍に対抗できなかったことは無念なことであろう。「十字軍」という言葉自体がアラブの人々には、今でも抵抗感を覚えさせるものとなっている。

十字軍の功罪

200年にわたる十字軍運動の功罪はなんであろうか。宗教的には、提唱したローマ教皇の権威が大きく失墜した。十字軍に神は働かなかったし、「神が保護してくださらなかった」という教皇への不信感となった。

政治的には、十字軍派遣により多くの戦費が消費され、多くの諸侯が戦死し封建社会から王権の強化が進行した。そして王権と教皇権の大きな衝突が生まれ、その後の宗教改革の下地ができた。

文化的には、東方文化に接し多くを学ぶことで、西洋社会はその後のルネサンス（文芸復興）の契機を得た。経済的には、兵士や物資の輸送を担当した北イタリアの商人が、東方貿易で大きく勢力を伸ばすことになる。

それに対してイスラム側の被害は深刻であった。アミン・マアルーフによれば「ムスリム世界は縮み上がり、過度に過敏に、守勢的に、狭量に」なり、西洋化を拒絶して開花発展から疎外されたという。その思いは今も癒やされ克服されていない。

マアルーフは、十字軍戦争で「西洋がアラブから学んだのに、アラブは何も西洋から学ばなかった」と書いている。イスラム世界をそうしてしまったキリスト教の罪は重いと言われる所以である。

ヨーロッパの歴史は戦争の歴史でもある。キリスト教徒がキリスト教徒や異教徒を殺戮してきた歴史である。「汝の敵を愛せよ」「迫害する者のために祈れ」というイエスの言葉がむなしい。

ローマ教皇庁の歴史も決して誇れるものではない。しかし、様々な問題や課題に直面しながらも、伝統を保持しながら、新たな刷新を繰り返し存続してきた教皇庁の歴史もまた興味深い。カトリック信徒の深い信仰心が教皇庁を支えてきたのであろう。

教えて欲しい、私たちの心のルーツを…　シリーズ『神々・自然　そして生命』第一作　ハイビジョン映像作品

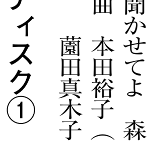
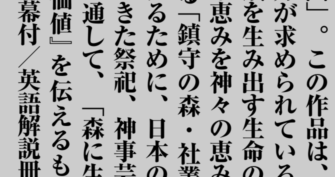
日本は森の國

シリーズ第一作「神々・自然そして生命」～日本は森の國～。この作品は、自然を基軸とした生き方が求められている中で、全生物の生命連鎖を生み出す生命の母体である森林の大きな恵みを神々の恵みとしてきた神の社である「鎮守の森・社叢」の持つ意味を広く伝えるために、日本の各地の祭りや伝承されてきた祭祀、神事芸能のハイビジョン映像を通して、「森に生きる日本文化の意義と価値」を伝えるものである。（英語解説字幕付／英語解説冊子入）

●総監修　薗田稔（京都大学名誉教授・秩父神社宮司）
●演出・撮影　茂木栄（國學院大學准教授）　松永国彦（KUNIディレクターオフィス）
●DVDで紹介している祭りと行事
吉野水分神社・お田植祭、飛鳥坐神社・おんだ祭、広瀬神社・おんだ祭、六県神社・子出来祭、諏訪大社・御柱祭、大神神社・鎮花祭・繞道祭、率川神社・三枝祭、龍田大社・風鎮祭、弥栄神社・鷺舞、和霊神社・牛鬼、早池峰神社・権現舞、鎌宮諏訪神社・鎌打ち神事、白山神社・大伴神社・榊舞・十五童の舞、八代妙見宮・八代妙見亀蛇、十根川神社・椎葉神楽、秩父夜祭、隠津島神社・羽山ごもりと蟠祭、岩木山神社・お山参詣、気多大社・入らずの森神事、静岡浅間神社・初宮参り、牡蠣の森を慕う会・海は森の恋人植樹祭、えりも岬緑化事業、伊勢神宮・明治神宮
●解説冊子　著者　薗田稔
「日本は森の國」～鎮守の森　その現在と意義を問う～
●日本は森の國　イメージソング「万葉POPS」CD
～聞かせてよ　森のこころ～
作曲　本田裕子（コクーン）
歌　薗田真木子（ソプラノ）

■ディスク①（44分）
第一話　籠もりくの大和
古代の英雄ヤマトタケルが詠んだ古事記にある望郷の歌「やまとは国のまほろば　たたなづく青垣山ごもれる大和しうるわし」これも大和と表現された大和の自然は、籠もりと子守りの祈りによって作られた宗教的な稲作風土であった。稲魂を赤子と見立て健やかな成長を祈り、風・水の順調を願い、疫病を除けるための祭祀や稲作の予祝芸能を伝える意味を問う。（17分）
第二話　森のまつり
祭とは、神に供物をタテマツリ、饗宴を催すことにある。山や森、そして水などに神を見い出してきた日本人の自然観と神事芸能の意味を、日本各地で行われている山里のまつりに見る。生命の健やかな成長と一人前になるための試練が祭りの本質的な意味を示している。（27分）

■ディスク②（49分）
第三話　神の木・神の森
巨木や御神木に掛けられた注連縄。巨樹や深い森に霊気宿る力を感じてきた私たちは、その霊気に触れることで活力をいただき毎日の暮らしの支えとしてきた。諏訪御柱祭を中心に古代からの木への信仰を問う。（17分）
第四話　森と現代文明
鎮守の森を分断し走る鉄道、取り残された聖地。明治末期、柳田國男や南方熊楠の神社整理への抵抗運動も実り薄く、現代に至っては、鎮守の森への産業廃棄物投棄など、長い間人々の心のよりどころであったはずの鎮守の森をめぐる危機的な状況から、鎮守の森を守ることの意義と価値を問う。（15分）
第五話　森をつくる話
地球環境の危機が問われているなか、海は森の恋人植樹祭、えりも岬緑化事業、広島被爆からの鎮守の森の再生などの活動を通して、私たちのこころと風土と暮らしを守ってきた、生命ゆたかな森のこれからを考える。（17分）

DVD製作・発行＝KUNIディレクターオフィス　日本文化映像研究所
製作・著作＝NPO法人社叢学会　愛・地球博出展実行委員会
（有）スタート・アップ
制作協力＝神宮司庁　神社本庁
価格　税込み1万円のところ7千円で。DVD2枚、5話＋解説冊子＋挿入歌CD「万葉POPS」
お申し込みはKUNIディレクターオフィス、左記FAXまたはホームページからご注文下さい。
電話・FAX　054（209）2530
URL　http://mori-minzoku.net/